文学の理論

筑摩叢書　77

文学の理論

R. ウエレック　A. ウォーレン
太田三郎 訳

筑摩書房

太　田　三　郎（おおた　さぶろう）

1909年　東京に生れる。
1937年　東北大学英文科卒業
1976年　没
著訳書　「比較文学」バイロン「海賊」
　　ハーン「人生と文学」他

文学の理論　　筑摩叢書 77

昭和42年5月25日　初版第1刷発行
昭和63年1月30日　初版第16刷発行

著　者　R. ウェレック
　　A. ウォーレン
訳　者　太　田　三　郎
発行者　関　根　栄　郷
発行所　株式会社 筑　摩　書　房
東京都千代田区神田小川町2の8
電話　東京（291）7651（営業）
　　（294）6711（編集）
振替　東京 6－4123
郵便番号 101－91

Printed in Japan

厚徳社・永興舎

ISBN4-480-01077-7　C1090

乱丁・落丁本の場合は，御面倒ですが小社読者係宛に御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

日本語版への序

われわれ二人の著書が日本の読書家諸氏の関心をひいていることを聞いて、われわれは喜びにたえない。こういう書物の翻訳が出版されていること、そのことが、文学は一つである、文学研究上の諸問題は一切の国において根本的には等しい、というわれわれの信念を確証してくれるのである。日本の読書家諸氏を念頭においてこの本を書いていたならば、この本は疑いもなくちがったものになっていたことであろう。即ち、本文の中の「綜合された文学史、超国家的規模における文学史、は将来にかけられた大きな希望である」という文句はもっともっと強調されていたことであろう。西洋と東洋との協力が存在すればおそらくは最も豊かな成果がえられよう。この協力は、現実の文学上の接触という問題にとどまるものではない、また、比較文学上のもっと綿密なしかも周到な検討をうけるべき陳腐な問題にとどまるものでもないのである。東西の協力は方法と識見とを互いに充実完成することになるのであって、将来において貴重な結果を生んでくるべきものである。西欧の学者は、その人が東洋学の専門家でないかぎり、東洋諸国の文学にはとかく無智である。しかも東洋諸国の文学は西欧の学者が考察の対象としている理論上の諸問題を一番よく解明してくれるかもしれないのである。われわれが西洋的な伝統の外にある諸国においてあるいは西欧的諸観念と縁のない時代や場所において研究すれば、詩の起源、ジャンルの本質とその発達、文学の社会的機能、文学の価値に関する人間の解釈およびその他の多くの問題、について、われわれは大いにうるところがあるであろう。究極においては、世界中のさまざまな文学的伝統に依拠するあたらしい文学理論が現われてくることができよう。東洋は、もしわれわれの実状判断が正しいとすれば、西欧の発達した分析上の技術から、また当面の問題に対する西欧の鋭い自覚から、大いに学ぶことが出来るであろう。こ

のわれわれの著書のような書物が日本における文学研究の進歩に、また日本における文学教育の再組織に、貢献しうればと、われわれは願っている。西欧におけるあたらしい学問の発達について知識をあたえる点で、またわれわれの眼前にある多くの困難にしてしかも未解決な問題に注意を集める点で、この書物がいささかでも寄与するなら、著者両名の深く喜びとするところである。国際間の諸関係へよせるわれわれの希望と同様に、学問研究におけるわれわれの希望は、世界の自由な諸国民間のいっそうの協力によって達せられなければならないのである。

一九五三年二月

北米コネティカット州ニュー・ヘイヴン　　ルネ・ウェレック

北米ミシガン州アン・アーバー　　オースティン・ウォーレン

第三版への序

アメリカとイギリスで本書の新版が出ようとしており、また本書がスペイン、イタリー、日本、韓国、ドイツ、ポルトガル、ヘブライ及びグジャラテイ（印度）の各語にこの順序で翻訳されていることを知り満足におもっている。さらに書誌は現在に応ずるように改訂されている。些少の訂正と追加とが本文に加えられている。しかし実質的にはこの第三版は再版の翻刻である。若干の点で著者はその考えを発展させたり、注で指摘したように論文中で修正しえた。これらの論文は一九六三年に『批評の概念』としてエール大学出版部から刊行された。また筆者の『近代批評史』は、今度は、『文学の理論』からその批評の規準と価値とを得ている故、ここに概説されている理論的な立場を支持するように試みられている。

一九六二年
コネティカット州ニュー・ヘイヴン

ルネ・ウェレック

第二版への序

第二版は実質的には次の点をのぞき初版の翻刻である。即ち、本文中で、若干の訂正と解明をほどこしたこと、論述中に若干の関連をあたえ、また文学理論の新しい発展に応じて若干の言及を加えたことである。しかし、初版の最後の章（「大学院における文学研究」）を省略してある。初版の発行（一九四六年）以後十年たち、この章は陳腐とおもえる。この章で提案されていた改善策のいくつかは多くの所で実現しているというのも省略した理由の一部である。その上、さほど重要でなく、またあまり入手しえない項目をはぶき、それらのかわりに過去八年間にこれらの問題について書かれた厖大な分量の論文のなかから少数ながら採録することによって、文献表を現在の実状に合わせるようにした。

一九五五・クリスマス

ルネ・ウェレック
オースティン・ウォーレン

序

この本の書名をきめるのはずいぶんむずかしいことであった。「文学の理論と文学研究の方法論」という妥当な「簡潔な書名」ですらごたごたしすぎるであろう。十九世紀より以前のことならなんとか書名をつけられたかもしれない。当時は「文学」という書名が書物の背にしるされ、そして完全な、内容の説明となる名称を題扉にしるすこともできたのであるから。

筆者ら二人が知っているかぎりでは類書が一冊もないような書物を筆者らは書きあげている。この本は、文学鑑賞の根本問題へ若い人たちを手引きしてゆく教科書ではないし、また（モリースの著『目的と方法』のように）学究的研究にもちいられる技術を概観したものでもない。詩学と修辞学（アリストテレスよりくだってブレア、キャンブルおよびケイムズをへている）、ベル・レートルの諸種のジャンルと文体論との体系的な取扱い、または文学批評の原理と称せられている諸著書、とある点では連関をもつものと本書は主張できるであろう。しかし筆者らは「詩学」（即ち、文学理論）と「批評」（文学の価値評価）とを、「学問」（「研究」）と「文学史」（理論と批評との「静力学」に対照した文学の「力学」）とに、統一しようとこころみた。ヴァルツェルの『内容と形態』、ユリウス・ペーターゼンの『詩に関する学』やトマシェフスキーの『文学理論』などのドイツとロシアとの書物の方に本書は近づいている。しかしながら、これらのドイツの学者とは対照的に、筆者らは他人の見解を模写したにすぎぬものはさけてきた、そして他人のもっているパースペクティヴや方法を考慮にいれてはいるが、首尾一貫した見地からこの本をかきあげた。トマシェフスキーとは対照的に、筆者らは韻律学のような題目について初歩的な知識をあたえようと試みているのではない。筆者らはこれらのドイツ人学者のような折衷主

義者でもなければ、また前記のロシア人学者のような空論家でもない。

在来のアメリカの学問がもっている標準によると、文学研究がおこなわれる基礎となる仮説を系統だてようとする企てそのものが、仰山なしかも「非学問的」なものとおもわれるし（これをするためには吾人は「事実」を超越しなければならない）、また高度に専門化された研究を概観し評価しようとするわれわれの努力には何か僭越な感がつきまとうのである。専門家はだれでも、その人の専攻する学問について筆者らの説明するところには不満の感がさけられないであろう。しかし筆者らは精密な完璧をめざしていたのではない、文学作品から引用された例はいつでも例にすぎないのであって「証拠」ではない。附載された書誌は「精選されたもの」である。それからまた、この本は筆者らが提起した問題を全部回答しようと試みたものでもない。筆者らはこの学問において、国際的であり、正しい問題をとりあげ、かつ方法のオルガーノンを提供すること、が筆者らにとっても他の人たちにとっても一番有益なことである、と判断したのである。

この本の筆者二人は、一九三九年にアイオワ大学ではじめて顔をあわせたのであるが、文学の理論と方法論とについて二人の意見が大いに合致していることをすぐ感じたのである。

ちがった背景や教育をもっていたのではあるが、われわれ二人は、「観念の歴史」の方面における歴史的研究と努力とにより、文学研究はとくに文学的であるべきだという立場へと、同じ態型の発達をとげてきていた。「学問」と「批評」とが両立しうると二人とも信じていた。二人とも「現代」文学と過去の文学とを区別することを拒んでいた。

一九四一年に筆者であるわれわれ二人はノーマン・フォァスターが監修し編纂した『文学の学問』という多数の学者の寄稿した書物に「歴史」と「批評」という各章を寄稿した。このフォァスター氏の思想と激励とに筆者二人は大いにうるところがあったことを悟っている。このフォァスター氏に（もし同氏のもつ主義に誤った印象をあたえるおそれがなければ）筆者らはこの本を献呈したいとねがっている。

この本の各章は現在一般に関心をいだかれているものをもとにしてくみたてられた。ウェレックが一―二、四―七、九―一四、および一九の各章の責任をもち、ウォーレンが三、八、および一五―一八の各章の責任をもった、二人が平等に協力して二〇章を執筆した。しかしこの本こそ、二人の筆者が共著者であることを互いに同意している共著の適例である。用語論、調子、強勢については、あきらかに筆者ら二人の間に二、三の軽い意見の対立がある、しかし、二つのちがった意見をもったものが実質的には意見が大いに合致しつつあるということこそ、この意見の対立の補いになりうるであろうと、筆者二人は考えるようにしている。

スティーヴンズ博士とロックフェーラー財団の古典研究部門とに感謝を捧げておかねばならない。これらの人人の援助がなければこの本はできあがらなかったであろう、またアイオワ大学の総長、教務部長、学部長にも、各位の援助と時間の余裕をあたえられたこととを、感謝しておかねばならない。R・P・ブラックマーとJ・C・ランソムの各氏にはその激励に対して、ウォーレス・ファウリー、ローマン・ヤーコブソン、ジョン・マックガリアード、ジョン・C・ポープおよびロバート・ペン・ウォーレンの諸氏には数章をよんでもらったことに対して、アリソン・ホワイト女史には、この本の構成全体にわたり緻密かつ献身的な援助をうけたことに対して、感謝しておかねばならない。

筆者らがすでに発表している論稿の一部をこの本に収載することを許してくれた編集者や出版者の厚意をも感謝したいとおもう――ルイジアナ大学出版部と *Southern Review* の前編集者クリーンス・ブルックス氏とにたいして（「文学作品の存在する様態」のために）、ノース・キャロライナ大学出版部にたいして（フォァスター氏編「文学の学問」、一九四一年、のなかの「文学史」の一部のために）、コロンビア大学出版部にたいして（「文学史における時代と運動」よりの一部と、「英語研究所年報」一九四〇―一九四一年掲載の「文学と諸芸術間の並行」のために）、哲学叢書にたいして（ニッカーボッカー編「二十世紀の英語」、一九四六年、のなかの「実証論への反抗」と「文学と社会」とのために）、および *Sewanee Review* の編集者ジョン・パーマー氏にたいして

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「大学院における文学研究」のために。

一九四八年五月一日
北米コネティカット州ニュー・ヘイヴン

ルネ・ウェレック
オースティン・ウォーレン

目次

日本語版への序
第三版への序
第二版への序
序

第一編　定義と区別

第一章　文学と文学研究……三
第二章　文学の本質……九
第三章　文学の機能……一九
第四章　文学の理論、批評および歴史……三一
第五章　一般文学、比較文学、国民文学……四〇

第二編　予備的作業
第六章　証拠の整理と確定……四九
第三編　文学研究上の非本質的態度
序　論……六五
第七章　文学と伝記……六七
第八章　文学と心理学……七四
第九章　文学と社会……八九
第十章　文学と諸観念……一〇八
第十一章　文学とその他の芸術……一二五
第四編　文学の本質的研究
序　論……一三九
第十二章　芸術としての文学作品の存在の様態……一四一
第十三章　好音調、韻および格調……一六一
第十四章　スタイルと文体論……一八〇

第十五章　心象、隠喩、象徴、神話……二四四
第十六章　叙事的小説の本質と様態……三二四
第十七章　文学上のジャンル……二四四
第十八章　価値評価……二五九
第十九章　文学史……二七四
訳者あとがき……二九九
事項索引
人名索引

文学の理論

第一編　定義と区別

第一章　文学と文学研究

まずわれわれは文学と文学研究とを区別しなければならない。この両者は別個の活動である――前者は創造的なもの、一つの芸術であり、後者は、厳密にいえば科学ではないにしても、一種の知識、一種の学問である。いうまでもないことだが、この区別をとり除こうと試みられてきた。たとえば、われわれはみずから文学を創作するのでなければ、文学を理解しえないとか、みずから英雄詩体二行連句を用いて詩作してみなくてはポープを研究できないし研究すべきでもない、みずから無韻詩で戯曲をかいてみなくてはエリザベス朝の戯曲を研究できないし研究すべきでもないとか、主張されてきた。文学創作の体験は研究家にとって有益なものではあるが、研究家の任務はこれとは全く別個のものなのである。研究家は文学にたいする自己の体験を知的表現へうつしかえ、またこの体験を同化して首尾一貫した図式にしなければならない、しかしてこの図式が知識であるためには合理的でなければならないのである。研究家の研究の主題が非合理なものであるとか、少くとも甚しく不合理な要素をふくんでいることは事実であろう、しかし、それだからといって文学研究家が絵画史家や音楽理論家、もしくはその問題については社会学者か解剖学者、の立場と何かちがった立場に立っていることはないであろう。

たしかに、この関係から二、三の困難な問題が生じている。提示されている解決策はさまざまである。文学研究は知識であることをあっさり否定して、「二次的創作」をすすめる理論家もいる。この「二次的創作」はわれわれ大部分のものには今日では無価値とおもえる結果を生じている――即ち、ペイターのモナ・リザ描写やJ・A・サイモン

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.